

(論文博士) (様式 4)

学 位 論 文 の 内 容 の 要 旨

氏 名 藤本 桂子 印

主 論 文

Experiences of adolescent daughters in beginning to live with their mothers' cancer:

A qualitative study

(母親のがんとともに生き始めた思春期の娘たちの体験：質的研究)

副 論 文

初発乳がん患者が罹患に伴う情報を小学生の子どもに伝える決断のプロセス

主論文の要旨

世界的に乳がんは女性が罹るがんの中で最も罹患率および死亡率の高いがんである。乳がん罹患のピークである40代後半から50代前半の女性は仕事や介護など様々な役割を抱えることが多く、思春期の子どもを育児をしていることも多い。思春期にある子どもは親子のコミュニケーションが難しいといわれている年代であり、また近年、遺伝性乳がんという言葉が浸透したことから、不安に駆られる親子は多い。そのため、本研究は母親のがんとともに生き始めた思春期の娘たちの体験を明らかにすることを目的に行われた。

参加者は、母親が乳がんと診断された時に中学生または高校生であった思春期の娘14名で、倫理的配慮のもと半構造的面接を行った。母親の診断から面接までは全員3年以内であり、面接の平均時間は48.3分であった。データを内容分析の手法を用いて分析した結果、母親のがんとともに生き始めた思春期の娘たちの体験は183のコード、23のサブカテゴリーから次の4つのカテゴリーが抽出された。(1)動揺や不安から心を安定させるために試行錯誤を重ねる。(2)自分たちの学校生活や将来への影響を最小限にする。(3)周囲の協力と支援で前に進む。(4)母親を守りケアするために家族とともに歩む。

本研究は母親の乳がん診断時に中学生または高校生であった思春期の娘のみに焦点を当てた。思春期の娘は母親が乳がんと診断されたことによる強い不安から、月経不順という身体症状を経験していることが分かった。また、学校やメディア、あるいは母親から与えられた不十分な情報により遺伝性乳がんへの懸念を抱えていることが明らかになった。さらに、思春期の娘たちはたとえネガティブな情報であっても最愛の母親に関することであるため真実の情報を知りたいと考えていることが分かった。

看護師は、乳がんの母親と娘がともに生きるプロセスをアセスメントする際、「娘が、母親のがんに対する動揺や不安から身を守る方法をもっているか」「娘は、自分にとって大切な人との関係を維持できているか」などを尋ね、これらの要因がある、またはそれらの要因を把握できない場合は、プロセスを困難にするリスクが高いと判断できる。看護師はこれら情報を早期に入手し、速やかに支援を開始することが重要である。この支援が娘の成長を促し、母親が安心して治療を継続するために重要なことである。

## 副論文の要旨

乳がんの罹患率は30代から50歳前後にピークを迎え、乳がん患者には小学生の子どもを持つ女性が多いことが推察される。小学生は6年間という幅広い成長過程の子どもを含み、「死の概念」にも違いがある。また低学年の児童では生活行動のための世話に加え宿題など日常的に母親が関わることが多く、乳がん患者の精神的および物理的負担は大きい。そこで本研究は、初発乳がん患者が告知を受けてから小学生の子どもに罹患に伴う情報を伝えることを決断するまでのプロセスを可視化することを目的に行われた。

対象者14名の平均年齢は41.9歳で、告知時に養育していた小学生の平均年齢は8.6歳であった。対象者に対し倫理的配慮のもと半構造化面接を行い、データは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。結果、本プロセスは、子どものためにがんの衝撃から自己を立て直すことから始まり、迫りくる時間の中で自己の役割を果たしながら家族と協働で子供に伝えることを決定していた。その後、子どもへの揺るぎない責任と愛情のもと伝える方法を決定し、罹患に伴う情報を子どもに伝えることに至っていた。また、プロセス全体にがんに打ち勝ち母親役割を果たす強化要因と、がん罹患に伴い母親役割を停滞させる内的葛藤が影響していた。

看護師はまず、それぞれの母親が持つ「がんに打ち勝ち母親役割を果たす強化要因」が何であるのか、早期に把握し強化要因を強化することが必要である。次に、看護師は母親の意向を尊重しながら子どもに合わせた病気説明の援助をすることで、母親が自信をもって子どもに伝える後押しをする。支援をすることが必要である。さらに、がんについて伝えられた時の子どもの反応を見極めるために必要な要素は決して特殊な内容ではなく、母親として普段から感じ取っている子どもの性格特性やイメージ、それぞれの家庭内で持つ子どもの役割や協力体制であることを看護師が患者に伝えることが子どもに伝える第一歩となる。一方、母親は「がん罹患に伴い母親役割意識を停滞させる内的葛藤」も持っており、看護師は、罹患に伴う情報を子どもに伝える課題に共に向き合い、がん治療を受けるために子どもの自立を促すことは母子双方が成長する機会となることを伝える。

看護師は本プロセスを理解して支援することが重要であり、母親が自信をもって子どもに罹患に伴う情報を伝えるための看護システム構築の必要が示唆された。